広島大学教員研修留学生用日本語教育と補助的ＣＡＩ教材に関する提言

峯　　正　志

1　はじめに

近年のコンピュータの発達は非常に著しい。しかもこれは、単にハードウエアの発達に止まらず、ソフトウエアに関しても同様である。また、コンピュータをスタンドアローンでなくネットワークに繋いで様々な情報を交換、利用しようという動きも激しくなってきた。そして、必然的に、これを言語教育にも生かそうという動きもまた、大きくなってきている。

コンピュータやネットワークを語学教育に生かそうという主旨の研究会、討論会が様々な場所で行われている。東海大学で行われたシンポジウム[注1]、イタリアで開催された国際会議[注2]等もそのような研究会の一部である。また、WWW[注3]を用いれば、その他様々な研究会のプログラムや発表要旨を手にすることができる[注4]。

先日、広島大学留学生センター主催で催された講演・討論会[注5]もそのような流れの中で企画されたものである。筆者はこの講演・討論会に参加し、最新の言語教育ソフトの内容や、各大学での現状、これからの展望等、貴重な情報に接することができた。

さて、その際に討論で筆者が感じたことは、未だ日本語教師側とソフトを作成する側の間のコミュニケーションが足らないのではないかということであった。日本語教師の側では、コンピュータがどのようなことができるかという点についての知識や情報に乏しく、工学系の研究者の「どのようなソフトが必要なのか」という問いに答える用意ができていないように感じられた。情報の乏しさは、また逆に、あれもできないか、これもできないかといった極端な要望も生じさせているような印象も持った。一方、工学系の研究者は、日本語教師側でどのようなソフトを希望しているのかという基本的なニーズが掴めず、いわば自分たちで独自に開発しているという現状であった。

筆者は、基本的には、現場でどのようなソフトが必要とされているのかについて明確にしてこなかった日本語教師の方に問題があると考えている。このような現状を打破するためには、我々日本語教師の側が、どのようなソフトを開発したいのかという点を明確に表明しなければならない。この小論は、そのための一助になればと思い、書いている次第である。

日本語教育用ソフトと言っても、対象とする留学生のレベル、教授内容等によって、様々な種類のものが開発されなければならないことは言うまでもない。従って、対象を明確にしておく必要がある。本稿では、筆者がプログラム担当者となっている教員研修プログラム留学生に対する日本語教育を対象とすることとした。

そこで、まず広島大学の教員研修留学生のための初級日本語クラスである「日本語特講」がどのようなものであるかについて述べ、それについてどのような問題点が存在するかを述べる。さらに、その問題点を解決するにはどのような教材が望まれるかという問題に触れ、その教材のコンピュータソフト化の可能性を探る。

2　広大における教員研修留学生の日本語教育について

広島大学では、1980年以来、15ケ国172人に上る教員研修留学生を受け入れている[注6]。留学生の中には、すでに日本語を学んでくる学生も、全く白紙の状態で来る学生もいる。日本語を全く学習したことのない学生に対しては、「日本語特講」という、教員研修留学生のみを対象とした初級のクラスを開講している[注7]。

毎年10月に来日する教員研修留学生のうち、日本語を全く学習したことのないもの、または、学習経験があるものでも、クラス分けテストで初級から受けた方がよいと判定されたものは、最初の６カ月、日本語研修を行う。これは、15週として30時間×15週＝450時間を目標としている。日本語の授業は朝９時55分から午後４時30分まで毎日あるが、平均して、１週に１日は、特別講義、または見学を設けているので、週35時間（７時間×５日）とはならず週30時間となる。下に、平成７年度の時間割を掲げる。

	2 (45分) 9：55-10：40	3・4 10：50-12：20	5・6 13：10-14：40	7・8 15：00-16：30
月	L．L．	日本語初歩	日本語初歩	日本語初歩
火	自由	日本語初歩	日本語初歩	日本語初歩
水	L．L．	日本語初歩	日本語初歩	日本語初歩
木	自由	日本語初歩	日本語初歩	日本語初歩
金	―	自由	他教材	自由

次に、どのような教材を用い、どのような分担で授業を行っているのかについて述べる。

まず、『日本語初歩』とある時間は、『日本語初歩』[注8]を教科書として用いた授業を行っている。平均して、２日で１課進んでいる。最初の数課に関しては、各課の分量が比較的少ないので、１日で１課進む。導入、本文、文型、練習、練習帳、漢字練習帳の順で進むが、見学または特別講義[注9]が入る場合があるので、２日で１課のペースを守るためには、これら

それぞれに２時間を割り当てる訳にはいかない。従って、各担当教官が、その時間内にできるだけ行けるところまで行こうという方針で授業を進めており、例えば、本文がすめば、すぐ練習に入るというようにしている。

ただ、各課が進むにつれ、過去に習得した項目を復習する時間も必要となってくる。そのため、『日本語初歩』の授業時間に他の教材を用いて、過去に学習した項目の復習を行う場合もある。今回は、12月頃からビデオ教材[注10]を用いた授業を１コマ、ある時間帯に定期的に行った。

L.L. は、日本語初歩に準拠して作られた L.L. 教材[注11]を L.L. 教室で聴かせている[注12]。

「自由」と書かれた時間は、いわば調整時間と言ってよい。この時間割では、留学生は授業の進み具合が非常に早いと訴えるのが常であり、予定通りには進まないことが多い。この時間は、生徒の進み具合を見ながら、足りないと思われる部分を補う時間である。従って、文法の補足説明を行うこともあるし、また、漢字の説明を行うこともある。また、留学生からの質問だけで50分が終わってしまうこともある。

金曜日に関しては、見学に充てられることが多いため、原則として『日本語初歩』を用いた授業は行わないことにしているが、進度が予定より遅れている場合、または理解が十分でないと判断される場合には、『日本語初歩』を用いて行う場合もある。普通は、ＣＡＩ教室を使って、服部セイコーのＣＡＩ教材「Let's Learn Nihongo」で学習したり、日本語ワープロの使い方の初歩を指導したりする。

金曜日の５・６限は、教育学部の留学生専門教官による独自教材を用いた授業である。

金曜日の２限目をなくしたのは、銀行や役所での手続き等が行えるように配慮したものである。

なお、留学生の進度を確認するため、冬季休業前に２回、冬期休業後に２回、計４回の試験を行っている。その場合は、通常、３・４限を漢字テスト、５・６を文法テスト、７・８限を答え合わせ及び復習の時間としている。

これが平成７年度の「日本語特講」の内容であるが、これは毎年同じと言うわけではなく、年毎に内容が幾分異なっている。いわば、試行錯誤を重ねながら変更を加えているわけである。[注13]

３　問題点

「日本語特講」における問題点をいくつか見てみよう。

第一の問題点は、教材を充分にこなすだけの時間がないという点であろう。『日本語初歩』という教材は、もともと「学習時間約300時間で終了することを予定して編集」されたものではあるが、現実には300時間で終わることは非常に困難である。[注14]そのため、新出内容を教えることで終わってしまい。学習したことを定着させる時間をもつことがなかなかでき

ない。

具体的にどのようなことが時間をとっているのか。導入、本文、文型、練習、練習帳、漢字練習帳のいずれに問題があるのだろうか。これらのいずれをとっても、新出単語、新出漢字の説明がいる。また、その課で用いられている語彙、漢字だけでなく、説明の必要上、また留学生の注意を引くためにも、さまざまな語彙、漢字の導入が必要になることは言うまでもなかろう。これがかなり負担になっている。これらは、場合によっては予想以上に時間をとる場合がある。ある話題に留学生が興味を示したような場合、途中で止めることが難しいからである。そのため、文法説明や、練習の時間を圧迫するようになってしまう。少なくともその課で学習する語彙、漢字の習得だけでも、教室以外の場所で出来ないか？

ここで重要なことは、あくまで予習用の教材が必要だということである。復習用の教材であれば、授業時間を効率的に使うという目的を満たすことができない。

その意味では、『日本語初歩』についている漢字練習帳１は予習用には使えず[注15]、この目的には適わない。ただ、これを予習用に改訂することは可能であろう。これについては、次の章で述べる。

昨年まで、服部セイコーのＣＡＩ教材「Let's Learn Nihongo」を漢字学習の補助教材として１～２時限を割いていた。これについての最大の問題点は、メインのテキストに用いている『日本語初歩』に準拠していないため、他の授業との関連が薄くなると言うことである。もちろんこの様な批判は的外れであることは言うまでもなかろう。準拠していないものを用いるこちらが悪いのであるから。しかし、このソフトは留学生が楽しく学習できるものであるが故に、全く外してしまうことは適当でないと考えている[注16]。また、授業時間以外に留学生に使ってもらうにしても、コンピュータ等の備品の管理の問題が生じる[注17]し、学生が個人的に自宅で使用することは全く考えられない。今のところ、授業の中で使うしかないのである。問題は、ただでさえ足らない時間を、このような教科書に準拠していない補助教材を用いた授業に割いてよいのかという点である。

日本語特講でのもう一つの問題点は、仲介言語の問題である（どこの初級のクラスでもいえることかも知れない）。最初の２～３カ月は主に英語で説明や指示を行うが、英語があまり通じない留学生も結構いる。教員研修留学生は、主としてアジアと中南米の教師または教育関係の役人であり、英語は彼らにとって母国語ではないからである。中国語話者やスペイン語話者等のクラスを作ることができればそれにこしたことはないが、人数等の理由から通常は無理である[注18]。このような場合に、少なくともその課で出てくる単語や文法を、留学生があらかじめ理解しておれば、この問題もいくらか軽減されるであろう。このような状況をふまえると、次章で考える教材における説明は、英語だけでなく、様々な言語で用意する必要があろう。

4　どのような教材が必要か

これはもちろん、どのようなクラスを担当しているのかという点が大きく関わっている。第２章で述べたように、本稿では教員研修留学生の初級クラスを担当する立場からの提言となる。

当然ながら、毎年増加する留学生を限られた数の教員で指導しなければならないのであるから、日本語教育のあらゆる領域ですぐれた独習用教材が開発されなければならないのは言うまでもない。しかしながら、そのような状況が近い将来起きることは考えられないから、出来る範囲のことを、少しづつでよいから導入していくより仕方がない。本稿では、筆者が日頃考えていることをいくつか指摘してみたい。

上述したように、１番の問題は、授業時間の不足である。筆者が常に感じるのは、このように短い時間数（６カ月）で『日本語初歩』を成功裏に終了するためには、授業時間以外での留学生の学習の質いかんにかかっているように思われる。

教材というのは、予習用、復習用、共に大事であるが、授業時間を効率的に使用するという目的からは、予習用のものを工夫することがより重要となろう。言うまでもないことだが、予習というのは授業の理解を高めるためのものであり、復習というのは授業内容の定着を強化するものだからである。

特に、漢字学習、および語彙の習得に関しては、自宅での学習に大きく左右されると言っても過言ではないと思う。

漢字の学習に関しては、現在のところ、教材として、『日本語初歩』に準拠した漢字練習帳１および２を、また語彙に関しては、『日本語初歩』の語彙集を学習者に渡している。

漢字練習帳２は、いわば漢字の問題集であり、自習用の目的で作られているものの、あくまで復習用であり、予習用に使えるわけではない。また、予習用へ改良することも困難である。しかしながら、漢字練習帳１は、漢字の書き順、読み方、意味、例文が納められており、予習用への改良が可能ではないかと思われる。これに、漢字の成り立ち[注19]、その他の情報を、各国語で説明したり、例文の翻訳を付けたりすることで、充分予習用にすることができる。

語彙学習に関しては、現在は、学習者が上述の語彙集を使ったり、教師が授業中口頭で説明したりしている。この語彙集に関しては、改良するよりも、全く新しいものを作るように考えた方が良かろう。その際には、語義、用例だけでなく、文法的事項（collocation、変化形等）、類義語、反意語、同音語、誤用例等の情報を、各国語で説明することが必要であろう。

以上述べてきたような教材は、基本的には印刷物でもよい。しかし、ＣＡＩであれば、音声も絵も動画も使えるので、知識の定着を強化するのによりよいのではないか。

また、説明の補足、改訂等の作業を行う際にも、コンピュータ教材であれば、簡単に行

われる。印刷物であれば、再び印刷し直すことが必要であり、費用等の点から、かなりの負担がかかってしまう。

このような理由から、印刷物等のメディアより、コンピュータを使ったソフトを使った方が有利だと考えられる。

次の章では、どのようなソフトを用いて開発すればよいのかという問題を扱う。

5　ＣＡＩ教材とするためのソフトウエア

前章では、どのような教材が必要とされるか、どのようなソフトウエアを作るかという、という問題を扱った。

では、この様な教材をＣＡＩ教材として開発するのに、どのようなソフトウエアを使用すればよいのか。大事なことは、コンピュータにあまり詳しくない日本語教師でも扱うことが容易なソフトであることが好ましいということである。

過去の講演・討論会では、マッキントッシュ用のソフトウエアである『ハイパーカード』が、操作しやすいという点から良いという意見を多く聞いた。しかし、操作しやすいといっても、ある程度のものを作るには、コンピュータ用言語をかなり覚える必要がある。また、マッキントッシュは、独自のＯＳを使っているため、多くの職場にハードウエアそのものがないという点も否定できない。では、どのようなものがいいのか。

筆者は、今のところ、ワープロで書類を作成するのと同じ感覚で教材を作成できる[注20]という点、また機種を問わず世界中に普及しているという点で、NetScape Navigator をブラウザとして用いる教材が適当なのではないかと考えている。少なくともその様なソフトの一つであることは、間違いなかろう。

結局、現在筆者が考えている教材としては、

1）新出語彙、および新出漢字の「予習用」教材。

2）「予習用」のものであるから、できるだけ多様な情報の各国語による詳しい説明が必要。

3）必ずしもＣＡＩである必要はない（印刷物でも可能）が、作成・配布が簡単であることや、改訂も簡単にできる等の理由から、ＣＡＩ教材とした方が望ましい。

4）コンピュータの専門家でなくても教材作成が可能な点で、NetScape を使って見る教材。

を満たすものである。

以上が、この小論の結論といえるであろう。

誤解のないように強調しておきたいが、筆者は「復習用」教材が必要ないなどと言って、いるわけではない。広島大学の教員研修留学生初級日本語クラスである「日本語特講」での教授効率を上げるためには、「予習用」教材がより重要ではないかと考えているだけである。

6　終わりに

筆者は、数年来、コンピュータをどう日本語教育に生かしたらいいのかという問題を、折に触れ考えてきた。しかし、ただ考えるばかりで、他人が開発してくれるのを待っているばかりでは何も解決しない。議論ばかり行うのでなく、拙いものでもよいから具体的にたたき台となるソフトを作ってみなければ始まらないと考えて、その第一歩としてこの小論を書いた次第である。

従って、本稿でその構想だけを述べたＣＡＩ教材については、実際に開発しなければならない。現在いくつかの語彙を使って、テスト版を開発中であり、近いうちに公開したいと考えている。

注

注1　シンポジウム「インターネットと語学教育－今何が始まっているのか－」のこと。平成７年10月14日に東海大学沼南キャンパスで行われた。なお、このシンポジウムの情報も、次の国際会議の情報も、筆者はコンピュータネットワークを通じて得た。今や、ネットワークを用いることなしには充分な情報が得られない時代に入っている。

注2　平成７年９月４・５・６日に、イタリアの Pavia で行われた、コンピュータを用いた日本語教育に関する国際会議。(CASTEL/J'95　The First International Conference of "Computer Assisted System of Teaching & Learning/Japanese)

注3　World Wide Web の略。コンピュータネットワーク上のサービスの一つ。WWWブラウザと呼ばれるソフトを使えば、ネットワーク上のさまざまな情報を簡単に見ることができる。

注4　例えば、大阪教育大学の「インターネットと教育」のホームページ(http://WWW.osaka-kyoiku.ac.jp/educ/) を見ると、研究会の案内、プログラム、発表要旨など、様々な情報が載っている。

注5　平成７年11月24・25・26日の日程で行われた。

注6　平成７年10月現在。

注7　中級以上の学力を持つと判断される留学生は、留学生センターの開講する日本語・日本事情のクラスを受けることになる。

注18　国際交流基金日本語国際センター『日本語初歩』凡人社。

注19　広島大学では、教員研修プログラムの最初の６カ月に、日本語だけでなく、教育及び文化施設への見学、日本の教育に関する英語での特別講義を行っている。平均して１週間に約１回行われている。見学は、できるだけ金曜日になるようにしているが、特別講義は、講師の都合で必ずしも金曜日になるとは限らない。金曜日以外に見学や講義が入ると、一週間で２課というペースは維持できなくなる。教員研修留学生のプログラムに関しては、『広島大学教員研修留学生プログラム報告研修論文アブストラクト集』を参照のこと。また、『広島大学留学生日本語教育』(本誌) にも活動報告が載っている。

注10　『ヤンさんと日本の人々』を用いている。

注11　北海道大学日本語研究会（村崎恭子監修）『日本語初歩ＬＬ用練習テープ』凡人社。

注12　教材のテープは、学生がいつでも聴くことが出来るように配慮している。希望者には、ウォーク

マンの貸し出しも行っている。

注13　ビデオ教材(『ヤンさんと日本の人々』)を使った授業を２回、ＣＡＩ教材(『Let's Learn Nihongo』)を使った授業を２回、１週間の時間割に組み入れたことがあるが、『日本語初歩』に充てる時間が大幅に不足したことがあった。

注14　「日本語特講」では450時間用意しているとはいえ、他の教材を使用する授業もあり、また特別講義や見学でぬける時間もあるため、『日本語初歩』の学習そのものに充てられる時間は、結局約350時間程度になろう。

注15　この教材には、漢字の読み、書き順、意味、その漢字を用いた例文が載っているが、説明は全く載っていない。つまり、教師の適切な指導無しでは使用できないものとなっている。

注16　これまでこのソフトを実際に使用してきた経験からいうと、どの留学生も一様に「面白い」という感想を持つようである。

注17　以前、日時を決めて、希望者にコンピュータ及びコンピュータ備品を開放したことがあった。

注18　英語しか通じないもの、スペイン語しか通じないもの、中国語しか通じないものが同じクラスで初級日本語を学ぶという事態が生じたこともある。

注19　『Let's Learn Nihongo』にある漢字の成り立ちの説明には、留学生たちは一様にかなりの興味を示す。ただ、これは、絵や動画を見せることで初めて可能になることで、教師が黒板を使って行う場合は、かなりの時間を取られることを覚悟しなければならない。

注20　ジャストシステムのワープロソフト『一太郎Ver.6.3』には、NetScape で用いるファイル形式の html 形式で文書を保存する機能がある。この機能を持ったワープロソフトは、これから増えてくるものと思われる。